踏　み　跡　＜My　Mountains＞

奥多摩	県境稜線縦走（一杯水から棒の峯へ）	No.122

昭和４４年３月２日
冬の奥多摩、夏の賑わいも忘れたかのように静まりかえる。同じ東京都でありながら、都心にいては考えられないような積雪もある。
まだ夜の明けぬ闇の町を歩き、国立発５時１１分の電車で立川へ。青梅線は５時２８分発氷川行。
釣り師にまじって寒々とした電車に乗り込む。電車が御岳を過ぎて山あいを走るようになる頃空は明るくなり、山肌の雪の白さが凍てつくような空気をさらに冷たく見せている。車窓から見ているだけでも思わず震えが来そうな。冬の奥多摩の山村風景には、そんな冷え冷えとした寒さ、冷たさがある。
氷川から４０分程で日原鍾乳洞の手前の東日原。
折り返すバスが方向転換をするのを見ながらヨコスズ尾根への道に入る。緩やかではあれ高度を上げるにつれ、石尾根、奥多摩の山々が視界に入るようになり、雪も２０ｃｍ、３０ｃｍと増えていく。
県境稜線の一杯水に着く頃積雪は４０～５０ｃｍ。一杯水は高校三年の時、高橋と石川を伴って川苔山から縦走した時に通った思い出の地。今日はあの時のコースを逆に歩いて、綾線を東へ向かう。雪の中に腰をおろして、家から持ってきた弁当箱入りの昼食をぱくつく。
一杯水から東へ、県境の防火線上の道をグングン下っていく。防火線の中は膝を没するほどの積雪。
重い三月の雪を漕いで三時間を要して日向沢峯。雑木林の中、雪に埋もれて半身を隠した指導標が一本。雪の中に腰を下ろして赤いリンゴをひとつ。
ここから右に川苔山への道を分けて、さらに県境尾根を東へ。日向沢峯を出てから長尾の丸までの稜線は地図上で見て「一度は歩いてみたい」と思っていたがなかなか実現しなかった夢の稜線。クマザサに覆われて簡単には入れない山と言われた時代もあったが、今ではさほどの悪さではない。小道が切り込まれて歩くのには何の不自由もない。
棒の峯、禿げ山、枯れ草、黒い土、青い空。誰もいない夕方、実に静かなうれしい頂上。
好調の波に乗って高水三山も越えてやろうかとまで思いはしたが、腹が減ってきてもうやる気がなくなってしまったので、名坂峠から大丹波へ下ることにした。
権次入峠から名坂峠までの桧林は実に美しい。足元の雪と桧の皮と枝の先、それぞれの色の取り合わせが何ともいえない。

大丹波川に下って、途中で牛乳とチョコレートで疲れた体に喝（活？勝つ？）を入れ、最後の一時間のバス道歩き。
川井駅１７時５０分着、実に腹が減った。
下界に下りほっとすると急に寒さが感じられて来た。
奥多摩の山、冬は静かでいい。

以上